

高校生諸君へ

はじめに

このシリーズは加藤陽子さんが高校生のために書かれた「それでも日本人は『戦争』を選んだ」を理解するための基礎知識を付けるために書き始めました。

今回は2・26事件に挑戦しましたが非常に苦戦しました。

選挙権を持つようになった皆さんが政治を考える上で、特にこれからの時代には歴史の知識が必要です。長くなっていますが読みやすいように工夫してあります。最後まで頑張って眼を通してください。

2・26事件に向かって

1, 恐慌の連続

第一次世界大戦は戦場がヨーロッパで日本の被害は僅少であった。この大戦中、欧州諸国は自国防衛のため、対外輸出ができなかった。その間隙をついて日本製品が大量にアジア諸国に輸出され、大戦を通して11億円の債務国から27億円の債権国に成長した。然し、大戦が終わり欧州諸国が力を回復すると好景気が一天して急速な不況となった。原因の一つが「メイド・イン・ジャパン」の粗悪な製品であった。

(1)戦後不況

1920年、戦後不況の始まりである。政府は増税と公債発行等の積極策をとったが全国16銀行が支払い停止になった。（当時の小銀行は個人商店的で銀行の資産が重役の関連する事業につぎ込まれていた）金融恐慌の前ぶれである。

(2)震災恐慌

更に1923年（大正12年）の関東大震災により、東京を中心とした工業地帯が壊滅的被害を受けたことによって震災恐慌が起きた。政府は震災手形を振り出して救済措置をとったが、震災に便乗する負債も含まれて、決済が遅れ深刻な社会問題となった

(3)金融恐慌

1926年若槻礼次郎内閣は大企業からの要請があった「金解禁」政策の舵をとった。目的は「財界の整理」と「産業の合理化」＝独占資本によって国際競争力をつけることであった。金解禁への準備として、未決済2億7000万円の震災手形の処理に手をつけた。議会で震災手形を抱え込んだ銀行の経営内容の審議が始まると、その危機的状況が明らかになり、銀行への信用が揺らいだ。1927年3月14日、片岡蔵相の失言がきっかけとなり大規模な取り付け騒ぎとなった。「今日、正午頃、東京渡辺銀行がとうとう破綻してしまいました」続いて台湾銀行が休業した。台湾銀行を危機に落とし入れたのが鈴木商店であった。台湾銀行が抱える震災手形の大半は鈴木商店のものであった。（台湾銀行と鈴木商店の癒着腐れ縁、台湾銀行救済をめぐる政府内に対立があり、幣原喜重郎外相の対中国柔軟外交を否定するために利用された）金解禁は浜口雄幸内閣まで持ち越された）政界の中央では権力闘争があからさまになるなか1927年には異常気象により東北地方の凶作が農村を襲い、弁当を持って行けない欠食児童や「娘の身売り」が始まった。



(4)昭和恐慌

1929年（昭和4年）9月「大学はでたけれど」の映画が上映され、新卒を採用する会社が少なく就職難は深刻で、タクシー（円タクシー）のドライバーになった人も多くいる。

10月24日ニューヨークでの株大暴落の後の11月、日本は金解禁を発表した。金解禁は難しい経済問題であるので説明に代えて別紙資料を添付する。日本の金解禁は世界が大恐慌へと突き進んでいく最中に断行された。

1930年（昭和5年）僅か5ヶ月間で2億2000万円の金が海外へ流失した。株も急落、物価の下落、特に農産物は3割以上急落した。アメリカに輸出が好調であった生糸が甚大なダメージを受けた。多くの中小企業が倒産に追い込まれ、大企業も賃金の引き下げと新規不採用で合理化をはかった。裁判所職員の賃金引き下げと反対運動もこの年の出来事である。街には失業者があふれた

金解禁の理論

旧平価解禁論

蔵相・井上準之助

・金輸出禁止（1917年9月）以前の
法定の円為替相場で解禁

対米100円=49.85ドル

●旧平価で解禁すると、為替相場は高くなり円高となる（円の切り上げ）

日本にとって—100円で49.85ドルのものが買える
外国にとって—49.85ドル出さないと100円のもの
が買えない

→ 輸入しやすい
→ 輸出にくい

準備— 輸出しやすいようにするためには、製品の価格を
下げることが必要
生産性の向上（産業合理化）、生産費の引き下げ
（人員整理、賃金カットで対応）

→ 金解禁準備
不況

実施後— 輸出の減少、輸入の増加 → 貿易赤字の増加で
金流出増加

製品が売れない → 物価の下落（デフレが起こる）

→ 通貨量の縮小の悪循環となる

→ **昭和恐慌**

(5)農業恐慌

1931年（昭和6年）北海道、東北地方を冷害による凶作が襲い、広い地域で飢餓状態となった。

11月1日の「都新聞」は「一粒の米、麦もなく僅かにジャガイモ、豆、カボチャをもって喰い、野生の芋などまで探し出して飢えを凌いでおり、若し今後一ヶ月もこのままに放置せば、随所に餓死者を生じる」と報じている。困窮する農村では頼母子講が相互扶助の役割をしていたが、掛け金を払えなくなった講は潰れ、高利貸しから借金をせざるを得ず「農家の娘売り」という悲劇が当たり前となった。（東北のある村では15歳以上24歳未満の女性467人の内23%の110名が売られた）

生糸の原料となる繭の価格は1921年の15%まで下落し、養蚕が専業に近い長野県や群馬県では繭の暴落の影響はより深刻で、小作農家を極貧に追い込んだ。米価もその年の豊作の影響し下落し自作農家も大きな打撃を受けた。農家の次男、三男は口減らしのため志願兵となり兵隊となり、その実情を語った。純粹で正義感の強い連隊付の青年将校達にも伝わった。東北地方の小作争議は激増するも、政府は小作料減免、納税猶予、電気料値下げなどの要求を認めず徹底的な弾圧をおこない、左翼的な農民指導者が一斉検挙された。

10年以上に渡る不況とこのような農村の悲劇を嘆く青年将校達の中に国家改造の思想が生まれてきた。満州事変は9月18日に始まった。国民にこのような苦しみを与えたのは、政治家や資本家が悪いという怨嗟の声があがった。労働争議が多発、ストライキの件数が激増した。労使関係の悪化、無産階級開放運動が昂揚し、日本共産党も弾圧を受けながらも活躍した。

前年凶弾に倒れた浜口雄幸元総理が死亡したのは8月であった。

国家改造運動とファシズムの進展

(1)広義国防論

1882年（明治15年）の「軍人勅諭」では現役の軍人は政治に関与してはならない。「-----前略----政治にかかわらず、只々一途に己が本分の忠節を守り、義は山獄よりも重く死は鴻毛よりも軽しと覚悟せよ。その操

を破りて不覚を取り汚名を受くるなかれ」軍人は天皇に忠節を尽くし、国防に専念していればよかった。

然し第一次世界大戦は、戦争を職業軍人に任せておけばよかった時代に終わりを告げ、戦争は国家総力戦となった。交戦国の全国民の犠牲と協力を強制することとなった。国家総動員的国防という広義国防論が台頭し始めた。日本の軍部は明治以来続いてきた議会制、政党政治を否定して、軍国主義に国家改造・国家革新せねばならないと考えはじめた。

軍国主義とは「国の政治・経済・法律・教育などの政策・組織を戦争のために準備し、軍備力による対外発展を重視し、戦争で国威を高めようとする立場・ミリタリズム」（広辞苑）

そして1に記した国内情勢に政治不信が高まり軍による改革に少なからずの国民的期待（満州への進出）が高まった。そのような時期に軍部に改革の動きが出てきた。

国家改造運動とファシズムの進展		
内閣	年・月	事 項
浜口雄幸	1930. 9 (昭和5)	橋本欣五郎陸軍中佐ら中堅将校、秘密結社「桜会」を結成
	11	浜口首相、東京駅で佐郷屋留雄に狙撃され重傷(翌年死亡)
	1931. 3	三月事件 桜会が中心となり、宇垣軍部内閣樹立をめざすが未発
若槻②	9	柳条湖事件 満州事変の発端となった事件 → p.269
	10	十月事件 桜会と大川周明のクーデタ計画、未遂
犬養毅	1932. 2~3	血盟団事件 井上準之助前蔵相と団琢磨* が射殺される → 2
	5	五・一五事件 海軍青年将校らが犬養首相を射殺 →
斎藤実	1933. 2	作家小林多喜二、特高により東京の築地署で虐殺される
	4	滝川事件 京都帝大教授滝川幸辰への休職処分 → 3
岡田啓介	1934. 10	陸軍パンフレット事件 陸軍省が軍事優先の国防国家提唱 → 図⑭
	11	士官学校事件 陸軍皇道派青年将校らのクーデタ未遂
	1935. 2	天皇機関説問題 菊池武夫、美濃部達吉の憲法学説を批判
	8	国体明徴声明 政府が天皇機関説を否定 → 3
		相沢事件 皇道派と統制派の対立表面化 → B
	10	第2次国体明徴声明
広田	1936. 2	二・二六事件 陸軍皇道派青年将校らによるクーデタ → C
	5	軍部大臣現役武官制復活 → D

(2) 1930年10月 「桜会」の設立、

発起人は参謀本部第二部ロシア班長橋本欣五郎中佐、（東京裁判ではA級戦犯）

その設立趣意書

「日本は内外ともに重大な危機に直面している。まさに非常時である。この危機を切り抜けるためには、なにを措いても先ず国防を充実させなければならない。それには軍事費が必要である。そこで目下の政治経済その他諸機構に根本的な変革を加えて、国防費を捻出すると同時に、変革によって銃後の一般国民、特に農民、の生活を安定させねばならない。また変革を成就するためには、強力な国家統制を必要とするので、共産主義はもちろん一般の自由主義的、唯物論的思想をも排除して、国民思想の統一をはからねばならない」（思想的指導者は大川周明・北一輝）参加者は現役の陸軍将校の佐官・尉官階級の者で国家改造に関心を持つ、私心無きものと限定した。1931年5月頃には約150名が登録されている。

(3) 1931年3月事件

橋本欣五郎中佐は第一回目のクーデターを計画、宇垣陸軍大臣を内閣総理大臣にすると口説きおとし、決行前に陸軍省、参謀本部、教育総監部の中堅将校を集めて計画の説明会を開いた。浜口首相の様態悪化を見越した宇垣はクーデターによらずとも自分が総理大臣になれそうだと判断して態度を豹変し中止させた。（宇垣は1938年1月総理大臣となる）クーデター序奏を告げる事件である

(4) 1931年9月18日満州事変勃発

すると橋本欣五郎中佐は関東軍の高級参謀、板垣征四郎に激励の私的暗号電報を再三にわたり打電し関東軍の進攻をあおった。

（私見・板垣征四郎は橋本に国内でクーデターを起こし「満蒙不拡大方針」に固執する政府を打倒すること及び関東軍の独立の密約があったかもしれない）

満州現地の進攻記述はベストピア348号参照。

(5) 満州事変に関する国内の動き

石原完爾「関東軍満蒙領有計画」に基づき参謀本部は「満蒙問題解決方策大綱」を作り、関東軍の計画を認め、世論操作をしながら半年以上も前からこの作戦（柳条湖爆破事件）を練り計画を立て準備していた。その折りに、現地では中村震太郎スパイ事件や万宝山事件が発生した。

（事件を起こさせたという陰謀説が有力）

国内では「満蒙不拡大方針」が有力で武力で解決すべきではないと冷静に考えていた。

①6月4日天皇は陸軍大臣南次郎大將を呼んで

「軍は軍規をもって成り立っている。軍規が緩むと大事を引き起こす恐れがある。軍記を厳正せよ」と訓令した

若槻礼次郎首相も「満蒙問題については、不穏な言動が盛んだが、日中親善を基調にすることを忘れないように」と注意を促している。

然し、陸軍は9月28日（当初の予定日）の決行を決めていたので、天皇や首相の言葉を無視して、陰謀の実行計画を進める。

②8月中旬、関東軍の高級参謀、板垣征四郎大佐が東京に出てきて、軍事課長永田鉄山大佐、作戦部長建川美次少将らと極秘会談をもった。

（「関東軍はやりますよ」と言いに来た）作戦計画は永田鉄山以下東京中央の陸軍省及び参謀本部の主要人物と綿密に話している。

③8月下旬、本庄繁大將が関東軍司令官として旅順に赴任した際の板垣との会話

板垣征四郎 「何か突発事件が起きた時、陸軍中央にどうすべきかの請訓を仰ぐかあるいは独断専行しますか？」

本庄繁大將「私は軍司令官としては、あくまでも陸軍中央の指示に従うつもりではある。が、独断専行を決するに躊躇するものではない」

④9月11日 天皇は再び南陸軍大臣を呼び

「万宝山事件といい中村大尉事件といい、まことに困ったことであるが、複雑な事情もあろう、よくそれを究明しなければならない。すべて非は向こうにある、という態度で臨んでいては円満な解決はできない。とにかく軍規を厳重に守るように、**明治天皇のつくった軍隊に間違いが起こってしまったては申し訳ない**」

南陸軍大臣「もつともです」

西園寺公望も「満蒙といえども支那の領土である以上、こと外交に関しては、すべて外務大臣に任すべきであって、軍が先走ってとやかく言うのは甚だけしからん」

南陸軍大臣「この問題に関しては、若槻総理からもたびたび小言を受け、陛下からもご注意があった。まことに恐縮千万であります。西園寺公の言われることは**いちいちごもつともで**、責任をもって注意するつもりであります」とムニャムニャと答えた。

⑤天皇と西園寺に叱られた南陸軍大臣が「このまま突っ走ると大変な事になるのではないか。内外の理解の『内』のほうのトップである天皇陛下以下の側近たちが猛反対となれば、計画は延期したほうがいいのではないか」と考え、

9月14日金谷参謀総長に相談し、関東軍に思いとどまるよう電話での説得が困難であるので建川作戦部長を満州へ派遣することを決めた。

（建川は関東軍の板垣と十分に相談済みで関東軍の作戦が変わるとは考えていない）

建川の内心は「俺が言っても関東軍の計画は変わらない。俺も一枚噛んでいる。賛成なんだよ」

建川は渋々命令に従ったが飛行機ではなく、時間かかる汽車に乗ってゆっくりと、時間稼ぎをしたが、建川が奉天に行くことが分かった瞬間に、橋本欣五郎中佐が関東軍司令部に電報を打った。

「事暴かれたり。直ちに決行すべし」

「建川奉天着前に決行すべし」

「内地は心配に及ばん、決行すべし」

柳条湖付近の爆破の早期決行を促している。（明らかな統帥権干犯。橋本欣五郎中佐と板垣征四郎とは繋がっている）

⑥9月15日、受け取ったのは奉天にいた板垣征四郎、石原完爾、花谷正少佐（特務機関）三谷清少佐（憲兵分隊長）、今田新太郎（駐在分隊長）が密会をする。

軍司令官本庄繁大將は旅順（司令部がある）にいるから電報は知らない。

奉天の5人の会談

「建川が来る前にやろう」「いや、話しを聞いてから決めよう」

随分もめた。話しは決着せず、翌日に持ち越し

9月16日夜、彼らはもう一度集まって、酒を飲みながらの論議となる。

堂々巡りで、酔いも回って翌日となる。

9月17日午前3時になって、

板垣「こうなったら運を天にまかせて割り箸を立てて決めようじゃないか。右へ転んだら中止、左へ転んだら決行としよう」

割り箸（鉛筆説もある）は右へ転んだ

石原「中止に一決」（石原の日記に記録が残っている）

暫くして、今田が口をひらく

「やはり、ここまで来たらやっつけてしまおうじゃないか」

三谷「そうだ、そうだ、やちゃおう」と大きな声で石原にかかる。

板垣「やるか」と話しは一転した。

今田「よし、準備に着手するぞ」と言って爆薬を仕掛けに出かけた。

どれだけ酒が飲まれたかは分からないが、何かのゲームを始める感覚である

⑦ 旅順の関東軍司令部では石原と三宅参謀長が奉天へ行こうとする本庄司令官を囲んで

「奉天作戦の後はハルピンまで進撃しましょう。ついでには、関東軍は全力を挙げても1万余しかない。張学良軍は奉天付近だけでも2万、満州全土では25万の大軍。これでは抑えきれないので、朝鮮にいる日本兵の越境による援軍を願いたい」

と説き伏せる。本庄は黙して聞くのみ。

（この越境軍については石原が朝鮮軍の作戦参謀神田正種少佐と打ち合わせ済み）

⑧ 9月18日石原は旅順に戻り本庄繁関東軍司令官の説得にあたった。午後7時、建川が奉天駅に到着すると板垣と花谷（酒豪）が迎え料亭菊文へ連れて行き、たつぷりと酒を飲ませ、こんにく問答で説き伏せた。

⑨ 午後10時20分、柳条湖付近の鉄道が爆破された。（予定は28日であつたが）

午後11時過ぎ、板垣は建川を残したまま菊文から飛び出し、第29連隊長と独立守備歩兵第2大隊長を呼びつけ

「張学良軍の攻撃である。奉天城、北大宮を攻撃せよ」と命令した。

⑩ 19日午前1時07分深夜奉天から東京陸軍中央へ「――暴戻なる支那軍隊は満鉄線を破壊し、わが守備隊を襲い――」と電報が入る。これは直ちにマスコミに流された。

⑪ 午後6時、本庄繁関東軍司令官が奉天に到着したとき、東京参謀本部金谷総長から「不拡大方針に確定した。軍の行動は必要度を越えることなかれ」

の電報がはいった。（中央からの命令）

本庄司令官は本部の方針に従い「速やかに停戦する。ハルピン進攻もつてのほか」と指示をだした。

石原独り言「ああ、わがことならず」と嘆息す。

板垣「おい、石原！ハルピンが駄目なら隣の吉林省への進軍はどうか？」

石原「そうか、吉林省は奉天を守るためには確保する必要がある」と元氣を取り戻す。

ここにも板垣の鋭敏な戦略があった。

板垣「吉林省は満鉄から離れすぎていて駐留権はない。然し、そこで暴動が起これば、在留邦人の安全確保のために出兵できる。奉天から出兵すると奉天の防備が手薄になる。よって、朝鮮軍の越境増援を要請できる」

三宅参謀長「それは良い考えである」と賛成、早速この計画を持って建川を口説く。建川は自分の役割（戦わないように説得のために派遣された）を忘れ賛成する。

⑫ 9月20日本庄と建川の会談となる。

建川「停戦するわけにはいかない。攻撃を仕掛けた以上は反撃もあるのだから、奉天を守るくらいのことはしないとイケない」

本庄はオーケーとは言わなかった。建川はあきらめて帰ったら、幕僚全員が夕方、本庄に談判にやってきた。それでも本庄は首を縦には振らなかった。

夜中の12時頃皆帰された。板垣だけが残った

本庄と板垣のにらめっこが午前3時迄続いた。そして、ついに

「OKと言わせた」説き伏せたのである

板垣は喜んで戻ってきて石原に「おい、すんだぞ」と言った。

21日未明、関東軍は攻撃準備を整えて進撃を再開した。

⑬ 軍隊を国境を越えて動かすには奉勅命令が必要である。本庄は東京の金谷参謀総長に報告した。金谷参謀総長は天皇にお願いに再三行くも拡大反対の天皇は「まかりならん」と面会を謝絶された。繰り返しの依頼も断られた。

朝鮮軍は神田正種作戦参謀に導かれて国境線の鴨緑湖まできて待機している。東京からの許可はでない。朝鮮軍司令官林銑十郎がここでも独断で越境命令を出した。

21日混成第39旅団の兵隊1万人以上が一気に鴨緑湖を越えて満州に入った。

(陸軍刑法第35条司令官、外国に対して故なく戦闘を開始したときは死刑に処す。第37条司令官、権外の事において已むことを得ざる理由なくして、ほしいままに軍隊を進退したときは死刑又は無期若しくは7年以上の禁固に処す)

⑭これを知った東京の陸軍は「大変な事になった。

「どうしよう」

「そうだ、閣議で決めてもらおう」

ということになり22日午前10時から閣議が開かれた。

⑮閣議の前に若槻首相は南陸相に確認した

「関東軍の今度の行動は支那軍の暴戻に対し真に軍の自衛のための行動か？このように信じてよいか？」

南陸相「そうだ」

閣議が始まると幣原喜重郎外相が、

「事件は全く日本陸軍の計画的行動によるもの」と奉天総領事から電報が入っているが、どうなっているのか」

と南陸軍大臣をつるし上げた。

更に外相は

「はたして原因は、支那兵がレールを破壊し、これを防御せんとした守備に対して攻撃してきたから起こったのであるか。すなわち、正当防衛であるか。もし然らずして、日本軍の陰謀的行為としたならば、我が国の世界における立場をどうするか。――この上はどうかこれを拡大しないよう努力したい。即刻、関東軍司令官にたいして、この事件を拡大せねよう訓令しようと思う」と南陸軍大臣に告げた。

南陸軍大臣

「そうは申してもフムフムニヤムニャー―実は朝鮮軍は国境を越えて満州に入ってしまった」

若槻総理

「なに！すでに入ってしまったのか。それならば仕方ないじゃないか」

この総理の一言が閣議決定となり、「朝鮮軍を放っておくわけにはいかない、予算として特別軍事費を出す必要がある」となり
かくして若槻首相は「閣議が全員一致で決定し、越境した朝鮮軍に特別軍事予算をつけた」と天皇に上奏した。天皇は参謀総長に「戦争の拡大はまかりならん。朝鮮の越境は認めない」とは言っていたが内閣が一致して決めたことに「ノー」とは言えないことになっていた。その後改めて天皇を訪れた金谷参謀総長に天皇は「今回のことは非常にけしからんことではあるが、閣議が一致して決めたことはやむを得ない。しかし、私はあくまで拡大に反対であるから、戦争をはやく終わらせるように」と命令された。9月22日であった。

（ベストピア348号で記述した、「満州事変に際し関東軍に賜りたる勅語」は1932年1月8日であるから、天皇の変化も早いものである。

『関東軍は自衛の必要上、素早く事変に対処して、各地に蜂起した匪賊を掃討し、非常な困難を克服して、よく頑張った。そのことを朕は、喜びほめてやる。これからも耐え忍び、もって東洋平和の基礎を確立し、朕の信頼に応えるよう努めよ』」勅語を賜った関東軍にもう怖いものはなくなった。）

（私見）閣議決定の怖さは今も昔も変わらない。政権をとれば独裁も可能になる複雑な国家組織は国民には理解出来ないように仕組まれているようです。満州事変の進攻についてはベストピア348号に記ましたので、ここでは更に1931年以降の国内の動きを見ていきます。

(6) 1931年10月事件、

①満州事変に呼応するかのように再び橋本欣五郎中佐はクーデターを企てる。

橋本は満州事変が起きると関東軍の行動を煽る電報を再三打電し、関東軍の行動を制止する、即ち「不拡大方針」の国内（参謀本部と海軍省）の動きに対してクーデターを起こし脅すかのような計画を立てた。決起は10月24日午前3時とされていた。「昭和維新」と称した。結果は未遂

になったが計画の規模は後の2・26事件をはるかに上回る規模であった。関係者には大川周明・北一輝・井上日召らの民間右翼、大本教の出口王仁三郎とも連携した。

宮城を制圧して、重鎮（牧野伸顕内大臣）を葬り、毒ガスや抜刀隊、飛行機も動員して、若槻礼次郎首相、幣原喜重郎外相、財界の巨頭を殺害する計画、その規模は将校120名、近衛師団の各歩兵連隊から歩兵10個中隊、陸軍爆撃機3～4機、海軍からは将校の抜刀隊10名、霞ヶ浦航空隊の爆撃機などが参加予定であった。クーデター後は荒木貞夫教育総監（皇道派）を首相に就ける。

②ここで組織の意図が微妙に変化しているのが見えてくる。橋本欣五郎中佐は清軍派で統制派に近く、皇軍派と対立する派閥であるが荒木は皇道派である。その荒木を首相にするという。既に橋本の意図は組織の中に埋没され、唯々、現政府と「君側の奸」の抹殺となっている。

③この事件の計画には「なんらかの演技」があるように私には思われる。本当に実行する意図があったのか？この計画は早い段階から漏れていた。参謀本部作戦部長及川は橋本の積極的な支援者であった。知らなかったのは作戦課長の今村均大佐（良識派の侍と評されている）くらいであったと言われている。軍部にも政府にも漏れていたにもかかわらず、直前まで中止の措置をとろうとするものがいなかった。

クーデター中止に動いたのは桜会の同士であった田中清大尉であった。田中はこの計画は無謀であると反対し今村均大佐に相談した。10月の中旬、今村均大佐は参謀本部第一課長の東条英機大佐と陸軍省軍事課長の永田鉄山大佐に相談して、陸軍省・参謀本部の緊急会議を開いた。教育総監の荒木貞夫も飛び入り参加した。

会議の進め方にも不自然さが隠せない。会議はクーデターを中止させるか否か？中止させるにしても説得だけですませるか、拘束すべきかが延々と論議された。

中止、拘束なしを強く主張したのは荒木であった。事件の首謀者、橋本欣五郎中佐ら13名は拘束されたが、逮捕ではなく、彼らは2～3人ずつ、いくつかの旅館に軟禁され、外出はできなかったが、酒も料理も飲み食べ放題、芸者を呼び寄せることもできた「賓客扱い」だった。その費用は参謀本部の機密費からだされたという。陸軍中央には彼らを最初から

処罰する意志はなかったようだ。処分は最も重い橋本欣五郎中佐が重謹慎20日という形式的なものであった。

事件は未遂に終わったが彼らの目的は達したと考えられる。即ち、関東軍と内地急進はの結束を見せつけることで、政府や参謀本部は満州事変不拡大方針を貫くことができなくなった。

④又、甘い処分は事後に起きるクーデターの呼び水となった。純真な青年将校は橋本らを桜会の「宴会派」と呼んで軽蔑したが、クーデターの方法はしっかり学んだ。桜会と別の道を行く青年将校たちは2・26事件に向かうことになる。

未遂となったことに鬱憤やるかたない過激な者が次の実行計画を立てた。

(7) 1932年2月9日血盟団事件

前年の事件にもかかわった井上日召（日蓮宗の僧侶で国粹主義者）は血盟団を組織し、国家改造を目指し邪魔者とみなす要人を「一人一殺」という手段で団員に命令し、1932年2月9日、前大蔵大臣・井上準之助（金解禁論で経済政策に失敗と判断された）3月5日三井合同理事長団琢磨を射殺した（ドル買いにはしり莫大な富を得た財閥の代表）国粹主義者の恐怖を経済界に与える事になった。

（1932年3月1日満州国独立宣言）

(7) 1932年5月15日事件

①1932年5月15日、首謀者は海軍中尉・古賀清志、海軍士官三上卓で陸軍士官学校の生徒たちを動員してクーデターを起こした。狙いは政治家の腐敗の代表として犬養毅首相、と天皇を思うがままに動かすことに邪魔な「元老西園寺公望、内大臣牧野伸顕、侍従長の鈴木貫太郎ら「君側の奸」であった。

「話せばわかる」という犬養首相（不正献金問題があった）が殺害された。

②この事件の事後処理が10月事件と同様に軽い処分であった。国民が同情的であったと言われるのはマスコミの誘導と考えられるが、海軍内部での発言は不思議なほど同情的である

東条平八郎元帥

「この士官たちの志は十分にわかっているから、彼らの志を国民に知らせると同時に、足りないところはお前達が援助してやってほしい」と海軍軍人に述べると

「わかりました。彼らの志を十分いかすようにいたします」と応答している。

加藤寛海軍大将

「君たちはじつに気の毒だった。僕がやらねばならないことを君たちがやってくれた。ほんとうに相すまない」

処分は首謀者二人には禁固15年（恩赦で軽減された）多くは無罪となったことと合わせて、これらの発言からこの事件は組織的な陰謀のようにとれる。（私見）

③この段階で西園寺公望も牧野伸顕も引退をほのめかすが、侍従長の鈴木貫太郎は意気軒昂として事件を批判して将来を予測している。

「軍人がだんだん政治に干渉し、政権に乗り出す気運が盛んになって来ている。それに邪魔になる人間をどんどん犠牲にする世相になって、犬養内閣も結局この災いにかかったのである。犬養さんがやられた原因は満州問題（不拡大方針・満州の独立に反対）といわれるが、一面には政友会内閣の勢力争いが含まれていると観察された。そしてそのやつらは軍人と結託したという噂があった。そういう策動家の手先になった軍人が、ついにあの暴行を敢えて行ったのであるが、その後の始末にいたってはなんとも遺憾きわまりない」（鈴木貫太郎はこの後2・26事件で襲われる）

④5・15事件の影響

犬養内閣は潰れ齊藤実海軍大将が総理大臣になる。明治31年（1898年）以来の政党内閣・政党政治が終わり「挙国一致内閣」が始まり、軍人の勢力が政治や言論を支配し始める。軍国主義時代の色合いが明瞭になった。テロへの恐怖から軍部に迎合する政治家が増えた。軍部の言論統制では滝川事件が有名であるが、教科書から削除されている小林多喜二事件について記す

(8) 言論統制・小林多喜二と滝川事件（1933）

①小林多喜二は「蟹工船」で有名なプロレタリアート作家

(若い世代における非正規雇用の増大と働く貧困層の拡大、低賃金長時間労働の蔓延などの社会経済的背景のもとに、2008年には『蟹工船』が再評価され、新潮文庫の『蟹工船・党生活者』が50万部以上のベストセラーになった。また、2009年にSABU監督によって映画化された-ウキペディアから引用)

多喜二は1933年2月20日に特高に捕まり、築地署で拷問を受け半日もたない内に殺された。拷問の残忍さは戦場の捕虜暴行に通じるものがある。

「何とむごたらしい有様であろう。毛糸の腹巻に半ば覆われた下腹部から、左右の膝頭へかけて下腹といわず、腿といわず、尻といわず、肌といわず、前も後ろも外も中も、まるで墨とベニガラとを一緒に混ぜて塗り潰したような、何ともかとも言えないほどの陰惨限りなき色で一面覆われている。その上、余程多量の内出血があるとみえて、股の皮膚がぱちりとへちわれそうにふくらんでいる。そして赤黒い皮下出血は陰茎から睾丸にまでも及んでいる。よく見ると赤黒く張り切った膝の飢えには、釘か錐（きり）を打ち込んだらしい穴の跡が、左右とも十五六カ所も残っている、そこだけは皮膚が釘の頭ぐらいの丸さだけ破れて、肉が下からジカに顔を見せている。それが丁度アテナ・インキそのままの青黒さだ。――そして左のコメカミには、一銭銅貨大の打撲傷を中心に、五つ六つの傷痕がある。それがみんな皮下出血を赤黒くにじませている。こいつを一つやられたただけだって気絶するよと、その時誰かが叫んだ。首には、ぐるりと一とまき、深く細引の跡が食い込んでいる。余程の力で締めたらしくくつきりと細い溝が出来ている。そして溝になったところだけは青ざめた首の皮膚とはまるで違って、やはり皮下出血が赤黒い無残な線を引いている。左右の手首にも、首と同様、円く縄の痕が食い込んで血が生々しくにじんでいた」

以降、多喜二の虐殺は人々の記憶のなかで特高警察の残虐非道の象徴となる」

(辺見 庸著「1937」p274~275引用)

政治家にはテロの脅威を国民には特高警察の恐ろしさと言論統制、恐怖政治の前触れを示すために起こされた事件であった。

② 1933年4月には滝川事件が起きている。言論弾圧の対象が共産主義から大学にまで及び学問の自由と大学の自治への弾圧へと拡大して、思想統一、広義国防論が推し進められている。

(9) 内部の対立と「陸軍パンフレット」事件（1934）

①第一次世界大戦の悲惨さを日本は直接に体験することはなかったが1923年の関東大震災の激甚な被害から学び、次の戦争は国家総力戦体制で戦わねばならないと考えるようになり軍の藩閥解消を求める声が陸軍内部で高まってきた。。長州閥解消と国家総力戦体制を形成する必要性に気づいたのは、永田鉄山とその子分東條英機、小畑敏四郎、岡村寧次であった。彼らの目的は陸軍改革で始まったが政策の違いから1932年には永田グループ（統制派）と小畑グループ（皇道派）に分かれた。1934年陸軍大臣が林銑十郎大将に変わり永田G(グループ)を人事で優遇し始め永田鉄山が軍務局長となった。

②両Gは激しい戦略論争をするが「軍の刷新、国家総力戦体制を形成」という点では一致しているので永田の統制派Gは、どうしたら国家改造ができるか、国民に何を協力させるべきかを明らかにするために「陸軍パンフレット」正式名「国防の本義とその強化の提唱」を作成し国民に配布することにした。（1934年10月）

書き出しは「戦いは創造の父、文化の母である」で始まり、「国防は国家生成発展の基本的活力の作用なり。国民は必勝の信念と国家主義精神を養い、それには国民生活の安定を図ることを要する」その為には天皇制国家にしなければならない。資本主義を見直し統制経済にしなければならない等の今後の方針が国民向けに具体的に示されていた。陸軍が確

信犯的に政治に介入して、軍国主義と広義国防論を国民に押し付ける役割を果たすものであった。

③小畑G(皇道派)も「これなら賛成」と意見の一致をみた。争いは一件落着かと思いきや、11月の特別議会で民政党や政友会からは陸軍の公然たる政治介入であるとの批判的な質問に陸軍大臣林銑十郎大將が「これは軍の一つの意見ではあるが、必ずしも実行しようというものではない」と弁明した。これに怒りをあらわにしたのが小畑G・皇道派の青年将校達で、統制派のエリート達は信用できない。彼らに任せておいては近代戦を戦える国防国家は出来ないと裏側で動き始める。「陸軍パンフレット」はこの後、陸軍の国民教育の基本テキストとなり復活する

(10) 士官学校事件（1934）

上記国会開催中に起きる奇妙な「クーデター未遂事件」である。

① 皇道派の青年将校達が士官学校の候補生を用いて「君側の奸」政府首脳を殺害し帝国議会、首相官邸を襲撃するという計画をしていた。

② 実際に計画を立てたのは統制派の永田鉄山、東條英機らと言われている。彼らが官学校の候補生らに実行させようとしたが候補生らは話しのつてこなかった。

③ 困った統制派が「皇道派の青年将校や士官学校の生徒達が不穏な計画をしていると密告し、士官学校の直接監督者である真崎甚三郎陸軍教育総監に責任をとらせる」という派閥争いの事件と解する（私見）

真崎は天皇機関説を排撃する皇道派の精神的リーダーで荒木貞夫陸軍大臣とともに隊付き将校から慕われていた。荒木は1931年犬養内閣の時から陸軍大臣、日本陸軍は「皇軍」、日本は「皇国」日本の精神は「皇道」と言い国際連盟脱退の推進者であった。

④ 永田鉄山は1935年8月皇道派の相沢三郎に斬殺された。

⑤ 国内では内部抗争と謀略の連続、満州では関東軍が侵略の勢いを強める。関東軍を統制するべき参謀本部は管理能力を失っていた（私見）

(11) 天皇機関説問題・国体明徴声明（1935年）

①陸軍パンフレットを読んだ美濃部達吉（東京大学教授・憲法学者で当時は貴族院議員でもあった）は「政府の既定の方針との調和をもちからず、ただ軍部だけの見地から自分の独自の主張を鼓吹し民心をして強いてこれに従はしめんとする痕跡に著しいことである」と批判した。（1934年11月）

又、統帥権干犯にかかる美濃部の学説は「統帥大権の及ぶ範囲は、ただ軍隊を指揮しその戦闘力を発揮することのみを本則とする」

これに従えば軍の編制や装備は統帥権の外にあり、政府の権限で軍縮を決めることは可能である。浜口内閣も美濃部説をとっていた。こうした美濃部の考えに対して軍は不快感をもっていた。

②そこで、1935年2月の貴族院本会議で菊地武夫（元陸軍中将・バックに狂信的な国家主義者蓑田胸吉がついている）が天皇機関説は不敬であるから美濃部の著書「逐条憲法精義」等を発禁処分にすべきであると発言した。

③天皇機関説とは「天皇の大権は天皇の一身に属する私の権利ではなく、天皇が国家の元首として行わせらるる機能であり、国家の統治権を活動せしむる力、すなわち統治のすべての権能が、天皇にその最高の源を発するものである」（美濃部の国会答弁）美濃部の学説は明治憲法を立憲憲法としてできるだけ民主主義的に解釈し、天皇の権限を法令の枠内に収めようとした。これに反対の学説は天皇主権説で「天皇は神であり天皇の統治権は一身に属する」と考える。この考えでは失敗の責任を天皇が負うことになるが、現役の陸軍将校や在郷軍人会、国家主義団体等は美濃部の学説は不敬であるとのキャンペーンを展開した。

④このキャンペーンの真の目的は美濃部の師である一木喜徳郎（枢密院議長）、金森徳次郎（法制局長官）らを失脚させて、当時の岡田啓介内閣を倒そうとする平沼騏一郎の策動があった。

岡田内閣は4月に美濃部の著作を発禁とし、陸軍から機関説排撃を明確にすることを求められ、これを沈静化するために2次に渡る「国体明徴に関する政府声明」を発表した。

現代文に訳すると「日本国は天孫降臨の時にくだされた神様のお告げによって明らかなように、万世一系の天皇が国を統治し、その天皇が祀る（まつる）恵みは天地とともにきわまりない、日本は万邦無比、他には

ない神様のお告げによって出来上がった国である。天皇がこの国を治めるということは神代の昔から決まっているのである」このように政府が決めてしまったので、日本はこれ以降これを逸脱する言論は認めらず、弾圧の対象となった。天皇神格化へとつながった。

その後一木喜徳郎（枢密院議長）は襲われ、一命をとりとめた。美濃部も1936年2月吉祥寺の自宅で右翼にピストルで撃たれ、右大腿部を負傷した。

⑤「文藝春秋」10月号城南隠士の記事

「この騒動の裏側には二つの潮流の争いがある。西園寺公望を本尊に牧野伸顕、斉藤実、高橋是清、鈴木貫太郎、湯浅倉平、一木喜徳郎ら宮中側近の穏健グループと、敵対する平沼騏一郎を旗印とする強硬路線の面々である。この強硬派に、重臣層を常々目障りに思っている軍部が結びついて美濃部をやり玉にして、穏健グループにメスをいれようとしたのではないか」

(12) 相沢事件（1935）

統制派の力で陸軍の力が強力になると同時に派閥抗争も極限に達する1935年8月12日白昼に、皇道派の相沢三郎中佐が陸軍省の軍務局長室に切り込んで永田鉄山少将を斬殺する事件が起きた。「国を危うくする張本人を斬り殺してまいりました。これから台湾に赴任いたします」と平然と上官に報告した。

翌年1月軍法裁判が開かれ真崎が証人として召喚されたのが2月25日であった。皇道派の青年将校達は「相沢に続け」となり1936年2月26日となる。相沢は1936年7月3日銃殺刑に処された。

私見----このように細かく事件を観察していくと、派閥の勢力争いが常に地下脈として流れているのです。官僚と政治家がポストにこだわる、しがみつくその欲望の連鎖が戦争に繋がっているかも知れません。人間

の欲望と組織の関係は学問としても成り立ちうると考えます。内紛、内
部対立は国民の犠牲を顧みることなく進んでいきます。

(13) 2・26事件（1936）

1931年の10月事件とよく似ている。予行演習済みのクーデターか？

1936年2月26日のクーデターは理解が困難な点が多い事件である。

個条書きに整理すると

①決起部隊は皇道派の青年将校達である。1483名の兵隊の多くは農村出身の純粋な若者で、農村の貧困からの脱出のために国家改造が必要であると洗脳されていた。

②クーデターの大義は「天皇親政」で政財界の腐敗の撲滅、農村の困窮を救済するという国家改造である。思想的には北一輝の影響を受けているものが多い。（統制派には大川周明の影響を受けていた）

③狙われたのは「君側の奸」である。齊藤実内大臣、高橋是清大蔵大臣、渡辺錠太郎陸軍教育総監が殺害され、鈴木貫太郎侍従長は重傷を負ったが一命をとりとめた。渡辺錠太郎陸軍教育総監が殺害されたのは前任の真崎甚三郎が更迭された後任というだけの理由と考えられる。

現在も活躍されている渡辺和子さんは9歳の時に父が射殺されるのを見ていたと話されている。派閥争いの犠牲者である。

④東京に戒厳令が布かれ、天皇は「直ちに鎮圧せよ」と命令した。統制派によって鎮圧されるのは29日。時間がかかっている。

私見――皇道派が権力奪還を狙った計画であるとも言われるが担がれた可能性もあると考えます。「君側の奸」を邪魔者としていたのは統制派も同じです。

天皇親政を望んでいたのは統帥権干犯問題、天皇機関説問題、「国体明徴に関する政府声明」を出させた陸軍共通のもので皇道派の特徴的主張ではない。クーデターの鎮圧に時間をかけすぎているのは何故か。その恐ろしさを天皇や政府、国民に見せつけるために反乱期間を延ばしたのではないか？この事件によって皇道派は一掃され、陸軍は統制派によって軍国主義が進められていきます。

松本清張の「2・26事件」の結論の文章は次のようになっています。

「これ以後の日本は軍部が絶えず2・26の再発をちらちらさせて政財界、言論界を脅迫した。かくて軍事産業を中心とする重工業財閥を軍が抱きかかえ、国民をひきずり戦争体制へ大股に歩き出すのである。この変化は、太平洋戦争が現実突如として勃発するまで、国民の眼にはわからない上層部において、静かに、確実に進行していった」

クーデターの実行犯は皇道派ですが、実行させたのは統制派と考えるとこの事件の説明がつきます。統制派によって陸軍は一枚岩になってファシズム体制を強固にして、日中戦争へと突入していきます。

今回は「1937」です。

参考文献

「昭和史」半藤一利著・平凡社刊

「アジア・太平洋戦争史」山中 恒著・岩波現代文庫

「図説・日本史通覧」帝国書院 2015年版

「太平洋戦争の記憶」エリック・デュシュマン編

アシェット・コレクションズ・ジャパン刊

3、熊本大地震被災の皆さま

お見舞いを申し上げます。

被災の大きさと収束の見込みが分からない地震は恐怖です。

一日も早く地震がおさまりますように、健康が守られますように
お祈りいたします。

私は14日から博多におりました。九州は第二の故郷で多くの親しい友人がおり、頻繁に連絡をとっていましたが、余震の揺れの中での会話が
多くありました。16日未明の地震は強烈に感じました。

前例の少ない本震と前震の入れ替わりが、被害を大きくしています。

地震の予知の難しさを知らされ

「災害は忘れたときにやってくる」科学者の言葉に真実さを感じます